

大英図書館の魅力

教授 村瀬 順子
(英文学・英米文化)

国際交流科目の一つである「イギリス文化研究・実践英語」は、夏季期間中にイギリスの大学での3週間の英語研修と周辺の都市への小旅行を通して、学生たちに英語学習のみならずイギリスの文化と歴史に触れてもらうことを目的として、1996年度から実施されてきた。研修先の大学はランカスター大学に始まり、ノッティンガム大学、ノッティンガム・トレント大学、キール大学、そしてカンタベリー・クライスト・チャーチ大学へと変わったが、大学での研修が終わった後は決まってロンドンに4泊し、ロンドン観光を楽しんだ。何と言ってもロンドンは首都であり、イギリスの歴史と文化が詰まっているからである。

ロンドン滞在の後半は自由行動としたが、ロンドンに到着していつもまず行なったのは、学生たちを連れてロンドンの主要な場所を歩いて回ることだった。バッキンガム宮殿からセント・ジェームズ公園を通過して、ウェストミンスター寺院、首相官邸や騎馬兵を眺めながらホワイト・ホールをトラファルガー広場に向かって北上し、ピカデリー広場からレスター・スクエア、コベント・ガーデンを抜けて大英博物館に至るというコースである。ハリー・ポッターが人気を博してからは、多くの学生たちがキングズ・クロス駅にある(架空の)9と4分の3番線ホームへの見物を希望するようになったため、キングズ・クロス駅にも寄ることが多くなった。以前は壁に買い物用のカートが半分はめ込んであるだけだったが、駅構内に専用のショップができてからは、カートを持って記念写真をとる場が提供され、観光客が長蛇の列を作っている。



ここ数年来、学生たちをキングズ・クロス駅に案内した後に必ず立ち寄るところが大英図書館である。キングズ・クロス駅に隣接してセント・パンクラス駅があるが、大英図書館はそのほぼ西隣にある。もとは大英博物館の中に設置されていたが、手狭になったため、1998年6月にこの地に移転した。但し、大英博物館にあった巨大な円天井の閲覧室はそのまま博物館に残っている。ここでマルクスが『資本論』を執筆したことは有名だが、周囲の壁面に張り巡らされた書棚に天井近くまで書物がぎっしりと詰まっている閲覧室は、大英帝国が築き上げた知の集積であり、正に壯観という他ない。

それに比べると新館の大英図書館は重厚さでは劣るが、色鮮やかで近代的なデザインで全館吹き抜けの自然光を取り入れた開放感溢れる建物となっている。地下1階、地上5階建てで、その中央にすべての階を貫いてキングズ・ライブラリーとよばれる書庫が設置されている。ここには、ジョージ4世によって寄贈されたジョージ3世の蔵書85,000冊が収蔵されている。1階にはブック・ショップと特別展の会場があり、今夏は18世紀の海洋探検家ジェームズ・クックに関する

資料が展示されていた。2 階には、Sir John Ritblat Gallery と呼ばれる展示室があり、大英図書館秘蔵の品々が展示され、一般に無料で公開されている。私が行くと必ず見るのは、18 世紀の小説家ジェイン・オースティンの携帯用のライティング・デスクや、ディケンズ、ハーディ、ワイルドといった 19 世紀小説家の手書き原稿などである。

3 階から 5 階にかけては、1,200 人を収容できる 11 の閲覧室 (Reading Room) がある。30 年以上前になるが、ロンドン大学で英文学をテーマとした夏期講座を受講したことがある。その頃、大英図書館はまだ大英博物館の中であり、図書館の閲覧証 (Reader Pass) をもらうには口頭で質問に答えるだけでよかった。今現在はセキュリティが強化され、大英図書館に入るには、入口で全員が手荷物チェックを受けなければならない、閲覧証をもらうためには名前と住所を確認できる ID を 2 つ持参しなければならない。以前、これも 10 年以上前になるが、パスポートしか持参しておらず、無念にも閲覧証を発行してもらえなかったことがある。幸い、ロンドン大学の図書館を利用することができたが、こちらは有料であった。大英図書館は 1759 年の開館以来、無料を貫いている。

セキュリティは厳しいが、大英図書館ではほとんど毎日といってよいほど様々な講演会やワークショップなどのイベントが開催され、研究者だけではなく、子どもから大人までが楽しく学びを深められるような工夫が凝らされている。書庫には、書籍・新聞・雑誌以外に地図・手稿・手書き譜面・音声資料・切手・版画・絵画などデジタル資料も含めて 1 億 5000 万点が収蔵されている。閲覧証を発行されるとアカウントが与えられ、事前に閲覧したい資料をネットで予約しておけば閲覧室のカウンターで受け取ることができる。どの閲覧室も利用することができるが、入口には職員が 2 人すわっており、入るときには閲覧証、出るときには手荷物をチェックさ

れる。一定の大きさ以上のカバンは地下のクローク・ルームかロッカーに入れなければならない、パソコンを持ち込む場合は備え付けの透明の袋に入れることになっている。鉛筆以外の筆記用具は持ち込みが禁止されている。閲覧室はいつもほとんど満席状態で、老若男女様々な人たちが机に何冊も書物を積み重ねて、熱心に勉強している。ロンドンはいつも観光客でごった返し騒々しいが、閲覧室の中は話し声一つ聞こえず、外の喧騒がまるで嘘のように、静寂に満たされていて、心静かに読書に集中できる。いつかもっとゆったりと時間をとって、じっくりと大英図書館通いをしてみたい、というのが私の今後の夢である。



大英図書館の外観



キングズ・ライブラリー